結婚したい艦娘としたくない提督の日々

454545191919男爵

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

まだ十八歳と年若い青年・小林環は妖精さんが見える、話せる、戯れる、という体質のため提督になる。

派遣された鎮守府は問題、問題児だらけ。

艦娘に育てられた青年が「俺の鎮守府は俺のやりたいようにやるぜー！」と頑張っていく物語。

転生者とかいません。

一部の艦娘の扱いが悪かったり、贔屓されたりする予定なのでお気をつけください。

そのうち、タグにて表記します。

しばらくは鎮守府立て直しです。

目次

特に意味のないぷろろーぐ ―――― 1
①小林提督着任する。かわいい霞ちゃんを添えて ―――― 9
②小林提督着任する。かわいい霞ちゃんを添えて ―――― 17
③小林提督着任する。かわいい霞ちゃんを添えて ―――― 24
④あれ？　って思っても、静かにしてほしいにゃ ―――― 30
⑤メンタルキューブって知ってる？ 36
⑥建造。そして兄貴姉貴の登場。 43
⑦暁型とうどん ―――― 51
⑧自分だけが良ければいいって奴ってどこにでもいるよね ―――― 57
⑨素麺とかうどんて消化にいいよね 64

特に意味のないぷろろーぐ

とある鎮守府。

白い制服に身を包んだ、ここの提督は無様に床に転がされ、青年に銃を突きつけられていた。

この場にいるのは青年だけではない。まだ年若い青年たちが、ひとりの青年の行動を青い顔をして見ている。

「貴様……私にこんなことをしてただですむと思うなよ」

男は海軍で少将の立場にある。もし、男が権力を振るえば、言葉通り青年はただですむはずがない。

「だーかーらー、もうあんたにそんな権力はねーんですけどー」

がつん。

音を立てて青年の蹴りが男の顔面を捉えた。

うずくまり、呻く、男を冷めた目で見る青年もまた、同じ白い制服に身を包んでいた。

「あんたさぁ、自分のやったことわかってる？　いくら、提督として優秀でもこれは許さ

れないっしょ？」
「なるほどな……貴様、艦娘穏健派の手のものだな。艦娘を人間と扱い、非人道的な戦略を許さないと主張する優しい優しい仲良し集団め……」
「ま、あんたは比較的マシな方だけどね。あんたのお仲間の中には、艦娘を人間としてみない癖に、手を出すとか意味わかんねー奴もいたから。もちろん、そいつは牢に入るし、家族も同じ目に遭わせるけどね」
「ははは……何が穏健派だ、貴様らの方がよほど」
「あんたは艦娘を人間として扱いこそしなかったけど、道具扱いもしていない。あくまでも艦娘という兵器を運用することを考え、士気向上のためなら娯楽もそこそこ許してきた。ただ、まあ、なんていうか、艦娘へのあんたの態度は少し悪かったようだな」
「私は艦娘と仲良しこよしをしたくて提督をやっているわけではない！　海の化け物から地上を守るために！」
「あ、そういうのいいんで。別に。ところでさ、あんたなんで、こうして無様に床にひっくり返ってるのかわかる？」
　青年に言われて、男は自身のしてきたことを振り返る。
　確かに男は、艦娘を兵器として運用してきた。だが、世に言うブラック鎮守府のようなことはしていない。男も艦娘を兵器として見ながらも、最低限の感謝はしていたの

だ。
　仲は決してよくないかもしれないが、上司と部下として問題なく鎮守府は回っていると思っていた。
　なのでどうしてこんなことになっているのかわからない。
「なぜだ？」
「あー、やっぱりあんた自分がしたことわかってなかったみたいだね。ヒントは浜風」
　とある駆逐艦の名前を言われて、男の肩が震えた。
　まさか……と、冷や汗が浮かぶ。
「おっと、どうやら心当たりがあるみたいだ」
「な、なんのことだかわからん」
「そうですかー。ったく、こっちもいつまでもあんたと問答してるつもりもないんだ。あんたが所属する中将派は、今日で壊滅。俺も、あんたをしょっぴいて横須賀に帰りたい。で、だ。そろそろ自分のしでかした罪を自覚したか？」
「知らん！　私はなにもしておらん！」
「ふざけんな！」
　青年の蹴りが、再び男を捉えた。
「駆逐艦浜風に〇シュの格好させやがって！　お前、それは提督としてやったらだめだ

ろー！」
「だまれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
「手こそだしてないみたいだけど、これ立派なセクハラだから！　パソコンのデータを見たけど、きわどい写真までたくさんとりやがって。もちろん、データ削除します」
「貴様っ、私がどれだけの時間をかけて……っ」
「いや、そこは時間かけちゃダメだろ」
青年の背後では、仲間たちもドン引きした顔をしている。
提督の罪状まで知らなかったようだ。
だが、罪は重い。まさか、某ソーシャルゲームの人気キャラクターのコスプレを艦娘にさせて、ちょっとエッチな写真をとるとは、海軍に属する人間の風上にもおけない。
「待て、これは合意の上だ！　確かに、彼女にはコスプレさせたし、写真も動画もとったが」
「……動画も撮ったの？」
「おのれっ、誘導尋問などしよって！」
「てめぇが勝手にゲロッただけだ。おら、吐け。どこに動画隠してる！」
「言うものか！　たとえ殺されても浜風マ〇ュの動画を渡すものか！」
四十半ばのおっさんの本気の抵抗に青年は諦めた。

そして、最後の手段を取ることにした。
「こういうことはしたくなかったんだけど、あんたが悪いんだぜ」
「……なにをするつもりだ」
「あんたには、清楚な奥さんと可愛い娘さんがいたよな」
青年の言葉に男はハッとする。
先ほど、目の前の青年は言っていた。艦娘に不貞を働いた者の家族を同じ目に遭わせた、と。
それはどう言う意味だろうか？
どこかの提督と同じく、牢に繋がれたのか？
それとも、陵辱された艦娘と同じ目に遭ったのか？
そこまで考えて血の気が引いた。青年の言葉は自分を脅すためのものかもしれない。しかし、仮に本当だったら、自分の家族はどのような目に逢うとうのだ？
「家族は関係ないだろう！」
「いーやー、あるんだよね。ところで、そんなご家族とテレビ電話が繋がっています。はい、ぽちっと」
青年がタブレットを操作すると、画面に恐ろしいものが映った。

それは陵辱され尽くした、妻と子の姿だった。

「貴様ぁあああああああああっ！」

怒りに身を任せ、男は青年につかみかかった。

馬乗りになり、拳を振り下ろす。

「私の妻と子を、よりにもよってあんな色物サー○ァントのコスプレをさせるとはぁあああああああ！」

魂からの咆哮だった。

青年の持つタブレットには、源○光のコスプレをさせられてまんざらでもなさそうな妻と、清○と静○のハ○ンのコスプレに身を包み楽しそうにピースサインをしている娘たちの姿がった。

「人間としてっ、越えてはならない一線があるだろぉおおおおおおお！」

「あんたの怒るポイントがわからないんだけど！」

数発殴られたものの、青年も負けてはいない。

蹴り返し、マウントを取り返すと、手際よく男を拘束した。

「ほら見ろ。向こうからこっちは見えてないけど、あんたの家族は今、オタクどもに囲まれて撮影会の真っ最中だ。もちろん、それ以上のことは起きないから安心しろ。だけ

ど、わかっただろ。あんたが浜風にしたことの罪深さが」
「ちくしょう……」
「幸い、浜風はあんたのことを恨んじゃいない。あの子もあの子なりに、あんたを慕っていたらしい。だけど、周囲はそうは思わなかったみたいだ。その結果、タレコミがあり、これだ」
男は家族の姿を目に入れるものかと必死に目を瞑っている。
これ以上の抵抗はないと判断した青年は、廊下に待機させていた憲兵を呼び、提督を引き渡した。
「さて、以上が艦娘を不当に扱ったものの末路です。とはいえ、さっきの人は、なんつーか特殊だったけど、中には艦娘だから人間じゃないと扱う馬鹿もいます。俺たちは、艦娘によって生かされています。そのことを忘れず、一人前の提督になりましょう」
「「「「はい！」」」」

青年の名は小林環。
若くして提督候補となった小林は、新たな提督候補を率いてとある提督の逮捕に赴いていたのだ。
今までのやりとりにあったように、ブラック鎮守府の提督ほど悪い人間ではないのか

もしれないが、一線を越えた人間の末路を教えることが目的だった。
近年、艦娘を虐げる輩が増え、マスコミの餌になることもしばしある。見目麗しい艦娘だからこそ、マスコミだけではなく世間も食いつく。
その一方で、艦娘を差別する人間も多く、ときには化け物扱いされることもある。
現在、海軍では、そんな艦娘の扱いを少しでもよくしようと頭を悩ませていた。
小林をはじめ、彼の同期の提督候補はそれぞれのブラック鎮守府に向かっている。
これは海軍の中の派閥争いでもあり、今回は艦娘の扱いをよくしようとする穏健派の勝ちだった。
だが、艦娘を兵器として扱い、人間として扱う気がない過激派の人間はまだまだいるし、穏健派の中に隠れて艦娘を虐げる輩もいる。
そんな恥知らずな人間に育たないように、現場を見せることを目的としたのだが、今回は提督候補に勉強になったかどうか自信がない。
「じゃあ、帰って鳳翔さんのご飯食べよっか。おごるよ?」
「「「ごちそうさまです!」」」」
後輩たちを引き連れ、横須賀第一鎮守府に戻る小林は、難しいことなどあまり考えていなかった。

①小林提督着任する。かわいい霞ちゃんを添えて

「……ここが駿河第一鎮守府か」

青年の話をしよう。

小林環。十八歳。物心ついた頃から妖精さんが見える、話せる、戯れることができる特異体質だった。紆余曲折あり、海軍大将を後継人に海軍学校に入学し、提督候補生だったが、先日めでたく提督となった。

「なんていうか、酷いわね」

小林提督の隣でボストンバッグを肩に掛け、嘆息したのは「朝潮型一〇番艦　駆逐艦霞」だ。

一見すると小学生にも見える少女ではあるが、立派な艦娘である。少々のキツい雰囲気こそあるが、間違いない美少女である。

口調と性格がややきつめな点はあるものの、決して悪い子ではないことを小林は知っている。とはいえこの二人もまだ一週間ほどの仲でしかない。

小林が提督になることが決まったことから、専属の艦娘として選ばれたのだ。

長い髪を右側で結んだ特徴的な髪型の霞は、目の前に広がる光景に、心の中で先行きを案じた。
「ここもブラック鎮守府だったんでしょう？」
「らしいね。俺は関わってないからあまり知らないけど、大将のところの大淀さんの話だと、ここの元提督は艦娘を道具としてみていたらしい」
「ふんっ、どいつもこいつもあたしたちをそういう目で見てるのね」
失望したような声を出した霞の頭を撫でるが、パンと払われてしまう。
しかたがないので、小ぶりなお尻をスカート上から撫でたら、今度は膝を蹴られた。
「悲しい話だけど、提督によって艦娘の扱いって違うからね。もちろん、俺は艦娘を道具なんて思ってないよ」
「……知ってるわよ」
「かわいい女の子として、性的対象として見てるから安心してほしい」
「知ってるわよっ！　というか、それのどこに安心しろっていうの！　このクズ！」
真顔で馬鹿なことを言う上司に、霞は頭が痛くなった。
しかし、一週間の付き合いで、言うだけ無駄であることはわかっているし、なんだかんだでいい人であることはわかっていたので、文句もこのくらいにして目の前の問題にとりかかることにした。

「ところで、あんたはこれは艦娘の仕業だと思う？」
「いーや、違うでしょ」
霞の質問に小林は即答した。
二人の前には、元小学校をそのまま利用した駿河第一鎮守府がある。
しかし、壁がひび割れ、いたずら書き、ゴミのようなものが投げつけられていた。
それだけならまだしも、壁の向こうの元校舎のガラスは無残に割れている。
ふた昔前のヤンキー漫画に登場する学校でも、ここまでひどくはない。
「なんでよ？」
返事をする代わりに、壁の一部を指差す小林。
ああ、と霞は納得した。
小林の視線の先には、艦娘を否定する言葉が描かれていた。
『化け物は出て行け！』
『戦争をしたいなら別のところでやれ！』
『私たちを巻き込むな！』
これでも比較的かわいいものだ。ひどいものになると、口にするのが不愉快なことまで書かれている。
「いつまでもここにいても仕方がないから中に入ろうか」

「そうね。いい加減荷物も置きたいし。ていうか、あたしたちが今日到着することって通達されてるのよね。迎えもないって失礼じゃないかしら」
「前提督に虐げられたなら、新しい提督にだって会いたくないじゃないの」
小林は内心、艦娘が襲いかかってきませんように、と願う。
最悪の場合は、霞の後ろに隠れる気満々だ。
「ふん……ならさっさとあたしたちだけでいきましょう」
霞に手を引かれ、小林は鎮守府の中へ足を踏み込んだ。
「まあ、なんていうか想像してたけど、掃除が必要だな」
「そうね。ところで、艦娘を見ないけど、どこにいるのかしら?」
執務室らしきものを見つけ、荷物を置く二人は誰にも遭遇しなかったことに首をかしげていた。
この鎮守府には二〇名以上の艦娘が所属しているはずなのだが、校舎を利用した鎮守府内に誰かの気配はない。
「寮舎にでもいるのかしら?」
「えっと、寮はここと隣接する校舎がそうみたいだよ」
コの字型の校舎の北側を寮舎として、南側を仕事場として使い分けていると資料にある。

他にもそう大きくはないが、グラウンド、体育館、プールもあるが、誰かが使用している気配はない。

「あたしは荷物をほどくから、あんたは妖精さんを探してきて、いいわね？」

「はいはい、ママ」

「誰がママよ！」

プリプリしながら執務室に隣接する部屋に荷物を持っていく霞を見送ると、小林は自身が持っていたバッグを執務机の上に置き、開いた。

「ぷはー、くるしかったです」

「ここがあたらしいちんじゅふですか」

「あたらしいせいかつに、どきがむねむねします」

「かすみちゃんつんでれ」

「ていとく、おなかすきましたー」

バッグの中から現れた小さな小人、妖精さんと呼ばれる少女たちだ。

彼女たちを認識できることが提督としての最低条件となる。

小林は、彼女たちと物心ついた頃から一緒にいた。認識することしかできない提督が多い中、意思疎通をはっきりすることができ、また友人のように好かれている。

彼のそばにひっついているのは、この五人。それぞれ名前もある。

彼女たちのおかげか、他の妖精さんからも好かれ、懐かれていた。
「ここの妖精さんたちってどこにいるかわかる？」
「うーん、けはいはかんじます」
「でも、かくれてる？　みたいな？」
「なにかにこわがっているかんじですね」
「ちょこれーとうまー」
板チョコを砕いて妖精さんたちに配りながら、小林は彼女たちの声に耳を傾けていた。
「怖がってる？　なにを？」
第一に浮かぶのは、ここの元提督であるが今はいない。
前提督は現在横須賀第一鎮守府にある牢屋の中だ。
「さあ？」
「そこまでは」
「わからないです、みたいな」
「さがしてきましょうか？」
「そうだなー。頼めるかな？」
「おーけーですー」

「ちょっこ食べたらいきます」
　チョコレートを頬張る妖精たんたちをつっつきながら、小林は執務室の中をぐるりと見渡す。
　元ブラック鎮守府になんどか殴り込みをかけた経験を持つため、何度もそういう人間の執務室を見ているが、ここはそれらと違った。
　どうもブラック鎮守府の提督は私腹を肥やすことが好きらしく、艦娘の扱いが悪いくせに、執務室を煌びやかにすることに労力を欠かさない人間が多い。
　もちろん、ブラック鎮守府も十人十色だ。中には、戦闘のためにすべてをつぎ込む者もいた。
　ここの前提督の艦娘の扱いは悪かったと証拠が出ている。しかし、私腹を肥やしていた様子はない。事実、この執務室も質素だ。
　執務机、ソファー、テーブル、そのくらいしかない。前提督の私室はすでに調査が入っていたが、最低限の物しかなかったと聞いている。
「ではいってまいりまーす」
　考え事をしていた小林が妖精さんの声に、ハッとすると、チョコレートを食べ終えた彼女たちがかわいく敬礼していた。
「あ、ああ、よろしく頼むね。あと、この鎮守府の妖精さんが協力してくれるっていたら、

俺に連絡はしなくていいら、割れてるガラスとかの補修を頼むよ」
「らじゃー」
「りょうかいです」
「やー」
「おまかせ、みたいな」
「ごほうびきたいしてます」
それぞれ返事をすると、ぴょん、と執務机から飛び降り廊下へ向かった。
「いつも元気だな、あいつら。さてと、ここの鎮守府に所属している艦娘のチェックもそうだけど、明日送られてくる子たちを受け入れる支度もしないと」
やることはたくさんあるなー、と思いながら、背筋を伸ばした。その時、誰かの気配を感じた。
「霞？」
返事はない。その代わりに、銀髪の少女が執務室の中に入ってきた。
少女は探るような目を小林に向けると、口を開いた。

②小林提督着任する。かわいい霞ちゃんを添えて

「吹雪型　五番艦　叢雲よ。あんたが新しい提督？」
「そうだよ。小林環だ。よろしく」
　小林は部屋の中に入ってきた叢雲に手を差し伸べ握手を求めるが、彼女は一瞥するだけだった。
「あんたとよろしくするつもりはないわ」
「そりゃ残念。で、用件はなに？」
「忠告よ。この鎮守府は提督という存在をよく思ってないわ」
「だろうね。知ってるよ」
「出て行けといっても、あんたも仕事だから無理でしょうけど、それならせいぜい執務室に引きこもっていることね」
「そんなことしたら怒られちゃうんだけどな。代わりに君たちが仕事してくれるわけでもなさそうだし」
「巡洋艦の中には手が早い子もいるからね。せいぜい気をつけなさい」

それだけ言うと叢雲は踵を返し、執務室から出て行ってしまう。
「ねえ、環」
「おっと、驚かすなよ。聞いてた？」
「隣の部屋にいれば嫌でも聞こえるわ。それより、ちょっとあたし用があるから」
「ん？　まあいいけどさ。俺は大将に着任したこと伝えとくよ」
「ちゃんと報告しなさいよ」
「はいはい」
「はい、は一回！」
「はーい」
適当な返事をする小林を睨む霞だったが、言動はさておき根が真面目なことを知っているのでそれ以上苦言することはなかった。
そもそも大将と小林の仲は親しいので、くだけた口調で会話していることを思い出す。
自分がいなくても問題ないと考え、霞は廊下に出た。
「ちょっと待ちなさい」
霞が声をかけると、不機嫌な顔をした叢雲が振り返る。

「……誰？」
「朝潮型一〇番艦　霞よ」
「吹雪型五番艦　叢雲よ」
「さっき提督との会話を聞いてたけど、微妙にキャラが被ってるわね」
「……あんた、そんなことを言うためにわざわざ追いかけてきたの？」
「違うわよっ。あんたが提督に忠告したように、あたしも忠告してあげようと思っただけよ」
　霞は思う。
　目の前にいる叢雲は、自分が知っている叢雲と比べて覇気がない。
　どこか痩せているように見えるのは気のせいだろうか？
（おかしいわね。前提督の艦娘に対する扱いは悪かったけど、食事や睡眠は最低限与えられてたって聞いてるのに。今だって生活するのに必要な物資は、決して多いとは言えなけど送られてるはずよね）
「それで、なによ忠告って」
「提督のことよ」
「なによ。新しい提督様に媚を売れとでも言うつもり？」
「そんなことは言わないわ。でも、その態度はやめなさい。あとで後悔することになる

わよ?」
「忠告じゃなくて脅しじゃない。悪いけど、あんたがいくら慕ってようと信用できない人間に媚びるつもりはないわ」
霞は内心ため息をつく。
わかっていたけど頑なだ。理由も理解はできるし、同情もしている。
(きっと側からみればあたしだって同じに見えるんでしょうね)
自分の性格が決して万人ウケするわけではないと痛いほど知っている霞は、どこか自分と似ている叢雲をこのまま放っておくことはできなかった。
「あんたたちが大変な目にあったのは知ってるけど、だからってこのままじゃいけないことくらいわかるでしょう。あいつは悪いやつじゃないし、信頼もできるわ。でも、とても冷たい一面も持ってるの」
「どう言う意味よ?」
「あいつはあたしのことを仲間として、家族として扱ってくれるわ。他にも、横須賀第一の金剛型とは家族のように仲がいいの。でもね、その一方で仲間や家族以外には冷たいわ。いいえ、興味がないといってもいい」
「それがなんなのよ」
「あいつが面倒なのは、一度でも関係が定まったら変化させるのが大変なのよ。今は、あ

いつのことが気に入らないからって、ツンケンしてても構わないけど、今後信頼できるとわかって、もっと親しくしたい思った時にはもう手遅れになっているかもしれないのよ」

「あたしは別に親しくしたいなんて思わないわ！」

「だから今後のことよ！　あいつはとにかく面倒なのよ！　もしあんたがこのままあいつに頑なな態度を取り続けても、決して悪いようにはしないでしょう。でも、あくまで上司と部下という関係で、薄っぺらいものになるわ。あんたが歩み寄ろうとしても、一度でも他人と認識されたらもう遅いの」

霞は思い出す。

自分も出会った当時は小林と頑なだったが、今思えば綱渡りなことをしていたと思う。

霞がまだ小林と出会うよりも前に、当時候補生だった彼はいろいろな艦娘と組み実習に当たっていた。

小林がそのとき組んでいたのは球磨型四番艦軽巡洋艦大井だった。

大井もなかなかやっかいな性格をしており、一見取り繕ってはいるものの、言葉の端々に毒が混ざり、気の強い性格もあって扱いづらい艦娘として有名だった。とくに姉妹の球磨型三番艦北上と実習中は引き離されていることも合間って不機嫌を隠そうと

しない。

そんな大井とうまくやろうと努力した小林であったが、大井は頑なだった。彼女なりに歩み寄ろうとしたのだが、面倒な性格が災いしてしまう。

小林と出会ったばかりの霞の目にも、大井は少々厄介に見えた。

実習が終了し、大井はそれなりに小林のことを認めたのだろう。歩み寄ろうとしたが、すでに彼の中ではあくまで実習のために組んだ艦娘くらいの認識しかなく、ひどく事務的な対応で終わった。

大井がショックを受けたことは、遠目から見ていた霞にもわかった。

同じく、遠目からその様子を見ていたのは、金剛型一番艦戦艦金剛は苦笑していた。いつものことだと笑う彼女は、大井をフォローしていたが、そのときはなんのことだかはっきりわからなかった。

その後、小林と一緒にいるようになり、金剛型と親しくなっていくと、小林環がひどく面倒な男だと言うことを知ることとなる。

小林は、自分の狭い世界以外は興味が希薄だ。彼の世界には、家族、仲間、友人くらいしかいない。どのような基準で対象を割り振るのか不明だが、はじめは歩み寄ろうとしてくれる。どんな問題児でも、堅物でも、性格が悪かろうと、関係ない。いいやつだから。しかし、そんな彼を拒めば、しばらくは根気強く接しいてくれるが、その内に関

係が決まってしまう。そして、一度でも決まったら、変えることは困難なのだ。
「正直、なにを言いたいのかわからないんだけど?」
「今までがどうだったじゃなくて、大事なのはこれからでしょう?　約束するわ。あいつはいい提督よ。だから、あんたも、ここにいる艦娘も頑なな態度はやめなさい。それがきっとお互いのためなのよ」
　正直、もっとうまい言葉で説得できれば、と霞は思う。
　どうしても自分が言うと、上からに聞こえてしまう。そんなつもりはなくとも、だ。
「……一応、忠告として受け取っておくわ。でも、あたしは自分の目であの男がどういう人間か判断するまで信頼はできないわ」
「わかってるわ。だから、早くあいつのことを知ってあげて」
　霞の言葉に、叢雲はそれ以上返事を返すことなく踵を返す。
　せっかく同じ鎮守府の同僚として出会ったのだ。できることなら、仲良くしたい。仲良くしてほしい。
　そう願う霞だった。

③小林提督着任する。かわいい霞ちゃんを添えて

霞が叢雲を追いかけ、ひとりになった小林は、大将に報告を終えると、所属する艦娘の資料に目を通していた。

実のところ、まだ本格稼働しないので、余裕はある。

前提督が捕まってから約三ヶ月間、艦娘たちも戦闘には出ていないはず。少しずつならしが必要だ。

それ以上に、おそらく人間不信になっているであろう、艦娘たちとうまく歩み寄ることをしなければいけない。

「叢雲の態度を見ると、難しそうだなぁ」

資材面は心配ないが、艦娘との関係に難儀しそうだとため息を吐く。

かつて、この鎮守府はブラックだった。ブラック鎮守府といっても、軽度なほうで、精々艦娘を道具扱いくらいだ。

性的虐待はもちろん、暴力などもなく、入渠させないこともなく、艦娘を道具として扱う一方で、道具としての管理はしっかりしていたようだ。

これは珍しいケースだ。

だいたい道具扱いする提督は艦娘の話を聞かない。したいようにするし、やりたい放題する。

だからブラック鎮守府なんて呼ばれる場所になるのだ。

しかし、前提督は扱いこそ悪かったものの、言うほどブラックではなかったらしい。

「ん？」

そんなことを考えていると、扉の向こうに誰かの気配を感じて顔をあげた。

すると、控えめなノックが響く。

「はいっていいよ」

「失礼致します」

丁寧に頭を下げてから、執務室に足を踏み入れたのは、袴姿の落ち着きのある女性だった。

「お初にお目にかかります。鳳翔型一番艦、軽空母鳳翔と申します」

「俺は小林環です。足を運んでくれてよかった。あなたとは話をしておきたいと思っていたんです」

事前に渡されている資料が確かなら、鳳翔はこの鎮守府の食堂を間宮と仕切っているとある。

小林は鳳翔型の知り合いはいないが、食事処や居酒屋を鎮守府内で経営している鳳翔

もいると聞き、一部の提督は彼女に母のような癒しを求める傾向にあるらしい。
「私に、ですか？」
「はい。あなたは食堂を仕切っていると聞いています。だから、今後のお話を――って、えええええっ!?」
お茶でも出して話をしようとした小林は面食らった。
なぜなら、鳳翔がその場に膝をつき、土下座したからだ。
「ええー、なんでー、どうしてー」
小林には女性に土下座されて喜ぶ性癖はないので、驚くばかりだ。
いや、突然の土下座に少々引いている。
「あの」
「どうかお願いします。みんなにどうか食事をさせてください」
「……おい、こら」
「あなたが望むことはなんでもします。伽も喜んでさせていただきます。生涯、尽くしますので、どうか」
「黙れ」
突如、低い声を出した小林に、鳳翔の体が震える。
「まずは、そのふざけた土下座をやめろ。俺がいつ、あんたにしろって言ったんだ？」

「も、申し訳ございません、しかし」
「あと、俺は一言もあんたらに飯を食うな、なんて言った記憶はない。つーか、伽ってなんだよ、なんで俺がそんな命令しなくちゃいけないんだよ？　それともあれか、俺がそんなくだらないことを言う人間に見えたのか？」
小林が怒りを覚えたのは無理もない。
ブラック鎮守府の提督じゃないにもかかわらず、鳳翔の態度はまさにブラックな提督へのものだった。
彼女たちが道具扱いされていたことは承知しているが、会っていきなり土下座をされるなど、自分はいったいどのような人間に見られているのかと不安になる。
「そ、そんなことは」
「じゃあ、なんで土下座なんてしたんだよ？　はっきり言って不愉快だ」
「申し訳ございません」
顔を上げていた鳳翔が再び土下座に戻ってしまうため、小林は嘆息し、顔を上げるように言う。
「まさかとは思うけど、あんた前提督にもそんなことを強要されてたんじゃないだろ？」
「いいえ、提督はそのようなことは一度も」
「じゃあ、なんで俺にはそんなことをするんだ？」

「それは……新しい提督がどのような方かわかりませんでしたので……」
「籠絡しようと？」
「違います！　私はただ、みんなに、食事をさせてあげたかっただけです！」
「生きているんだから飯は当たり前じゃないか。俺は、飯抜きにするほど鬼じゃない。この鎮守府には定期的に食料などは届いているはずだよな」
「……え、ええ、届いています」
「じゃあ、今まで通りにしばらく頼む。まだ鎮守府を動かすほど、こっちが準備できてないんだ」
「……はい。申し訳ございませんでした」
「もういいから、立ってくれ。霞に見られたら俺が叱られる」
「……はい」
　立ち上がった鳳翔に思わずため息がこぼれた。
　なぜ彼女がいきなり土下座などしたのか。いくら自分が新しい提督だからって、伽をするとまで言うとは少々いきすぎだ。
「いきなり怒ってすまなかった。だけど、俺は飯を食わせないなんてことはしないし、伽を命じたりしない。すぐに信頼するのは難しいだろうけど、せめて信用しようとしてくれると嬉しい」

「違います！　信用していないわけでは……！』
「もしかして、俺に他になにか言いたいことがあるのかな？　あるのなら、言って欲しい。俺はそのためにここに提督としてきたんだ」
「……ありがとうございます。ですが、大丈夫です」
鳳翔はそれだけ言うと、深々と謝罪し、執務室を後にする。
「……本当に、大丈夫なのか？　明日、霞に様子を見に行ってもらおう」
そう決めた小林だが、その決断が間違っていたと思い知ることになるのだった。

④あれ？　って思っても、静かにしてほしいにゃ

「ふぁ……ねむ」
「もう、だらしないわね。いくら朝だからって、もっとしゃんとしなさい」
慌ただしく終わった着任初日を終えた翌朝。
叢雲と鳳翔以外の艦娘と顔をあわせることなく、小林と霞は、まず自分たちの部屋を整えた。
使われていなかった執務室の隣の部屋を、小林と霞の部屋にして、妖精さんたちに頼んでいろいろ生活しやすいようにしてもらった。
さらにその隣の部屋を、風呂とトイレに改造してもらい、本日着任予定の明石と朝潮のために、空き部屋を綺麗にした。
夕食を取る暇もなく、片付けと、大将への報告、知己への連絡、ＩｎｓｔａｇｒａｍとＴｗｉｔｔｅｒの更新とすべきことは多々あったのだ。
「明石と朝潮ちゃんが来るのっていつだっけ？」

「十時よ」
時計を見ると、すでに九時三十分。
執務室で、引き継ぎの書類と格闘中だが、出迎えをしたいと考えていた。
「じゃあ、もう少ししたらいこっか」
「そうね」
霞の返事が短いのは、小林がサインする前の書類に目を通しているからだ。
「書類は私に任せなさい！」と、平らな胸を張ってくれた霞を、小林は無条件で信頼し、任せている。付き合いこそ短いが、なかなか深い時間を過ごしたので、霞がしっかりものであることや、仕事に手を抜かない性格であることも知っている。
根をつめることもないので、安心して任せられるのだ。
「さてと、今日は明石が来るから建造して、ここの艦娘にも会っとかないとまずいよなぁ」
小林のつぶやきに、霞の手が止まる。
「なによ、会いたくないわけ？」
「そうじゃないけどさ、ほら、俺っていくつものブラック鎮守府を潰してきたじゃん？」
「そうね。たしか、艦娘たちのケアもしたんでしょう？」
「ケアっていうか、次の鎮守府を探したりね。ツテを使っただけだから、面倒でもなんで

もなかったんだけどさぁ」

精神面のケアは、女性カウンセラーや精神科医、同じ艦娘が行う。

とくに暴力を受けた艦娘には徹底するのだ。場合によっては解体を望まれる場合もあるが、そのようなときはきちんと艤装を外し、艦娘から人間になったあとまで数年単位でケアがされることになっている。

「俺、必ずと言っていいほど襲われるんだよね」

「……え？　なによそれ？」

「ほら、ブラック鎮守府ってひどい目にあった艦娘がいるじゃん。そういうところに限って規模が大きかったりするじゃん。ひどい子だと人間を憎悪しているっていうか、他の仲間を守らなきゃって感じがすごいのよ。で、提督が捕まって、外部から新しい人間がきたことがスイッチになって結構攻撃的になるだよね。まあ、わからなくもないけどさ」

「襲われたって、怪我とかは？」

「まあ、そこはそれなりに対処はしたけど。とにかく川内とか神通とか川内とか川内とか、加古とか、川内とか、川内とか、神通とかがもう闇夜に紛れて襲いかかってくるんだよ」

「……川内ばっかじゃない」

「うん。なんだか巡り合わせが悪いみたいでどの鎮守府でも川内が襲って来るんだよ」
「横須賀の川内さんはあんたのこと大好きなのにね」
小林の知る、川内型一番艦軽巡洋艦川内は、夜戦好きな忍者だ。
割とどこの鎮守府でもそうらしい。
ただ、横須賀の川内の特徴は、「那珂ちゃんより私のほうがアイドルになったら売れそうじゃん」と本気で思っていること。実際、妹である川内型三番艦那珂に面と向かって言ってしまい、つかみ合いの喧嘩となったのは二年ほど前のこと。
当時、神通と小林、そして金剛型四姉妹で喧嘩を止め、なだめ、仲直りをさせるのに一週間必要だった。いい思い出である。
以来、那珂は川内を姉と慕いつつ、ライバル視しているのだ。
「まあ、同じ川内って言ってもそれぞれ違うからね」
「そうね……って、話してる間にもうこんな時間よ。そろそろ迎えにいきましょう」
「落ち着きなよ。いくらお姉ちゃん来るからって、これからはずっと一緒なんだしさ」
「お、落ち着いてるわよ!」
丸めた書類を投げる霞の頬は赤い。
隠しているようだったが、朝からずっとそわそわしているのだ。
もともと霞は多くの鎮守府を転々としてきた経歴を持つ。そのため、特別な絆を結ん

だ姉妹艦はいない。
だが、横須賀鎮守府で小林と出会い、彼の知り合いである朝潮と出会った。
いろいろと問題を抱えている朝潮は、同じく問題を抱えていた霞とあっという間に打ち解けた。もともと姉妹艦であるということもあっただろう。
一度は、鎮守府着任のため離れ離れになりかけたが、幸いなことに、朝潮も着任することになったので喜んでいるのだ。
「ほら、それじゃあ、お出迎えにいこうぜ」
「ええ！　ほら、早くいくわよ！」
急かす霞に苦笑しつつ、環は椅子から立ち上がる。
まだ四月上旬と肌寒いので、上着を羽織って、霞と手を繋ぐと鎮守府の玄関に移動した。
そして数分が経ち、横須賀から艦娘二人を乗せた車が到着し、中から見知った少女たちが現れた。
ひとりは黒髪を伸ばした、生真面目そうな印象を与える少女だった。霞と同じ制服を着ている。
もうひとりは、ワンピース型のセーラー服に身を包んだ、緑色の髪を地面に着くほど伸ばした少女だった。

「朝潮型駆逐艦ネームシップ朝潮です!」
「たった一隻の工作艦の明石だにゃ!」

⑤メンタルキューブって知ってる？

「姉さん！　って、あれ、明石？」
「そうだにゃ。司令官が建造した一人目になる明石だにゃ」
「……なんで猫なのよ。髪も緑だし。私の知ってる明石さんって、赤くてぶっといもみあげなんだけど」
「それはそれで酷い認識にゃ」
　まるで偽物でも見るような目をして明石を見つめる霞。
　小林はそんな二人を微笑ましく見る。
「提督！　お久しぶりです！　霞も久しぶりね」
「朝潮――！　あいかわらず黒髪ロングが清楚で可愛いなぁ。お嫁さんにしたくなるじゃないか」
「え、えへへへ」
　生真面目に敬礼しつつ挨拶をした朝潮だったが、小林の言葉に照れたような仕草をする。

それがまた可愛らしく、霞と明石の頬も緩んだ。
「あの、ところで、ここは本当に鎮守府でいいんでしょうか?」
「えっと、まあ、その、だ。もとは学校だったから鎮守府には見えないかもしれなしけど」
「いいえ、そうではなく!」
「あー、なるほど」
不安げな瞳を向ける朝潮の疑問に、合点がいった。
彼女と明石の視線の先には、荒れ果てた校舎の姿がある。鎮守府を覆う壁に書かれている、艦娘を否定するようないたずら書きを無視できなかったようだ。
「色々と思うことはあると思うけど、あんまり気にしなくていいよ。どこにだって、くっだらない人間はいるもんさ。いちいち気にしてたらきりがない」
「そうね。向こうがこっちを嫌うなら、私たちから関わる必要なんてないわ」
「そんなことよりも、そろそろ建物の中に入ろう。見てくれはこんなのだけど、中身はましだよ。昨日から妖精さんたちが修繕してくれてもいるからね」
「はい!　それでは、この朝潮、駿河第一鎮守府に着任致します!」
「同じく、明石も着任するにゃ!」

そんな四人を見ていた影がある。
一人ではない。数人の艦娘が、息を殺し、新しい提督と艦娘がどのような人物なのか探ろうとしているようだ。
「……どうせ人間なんて」
とある艦娘がつぶやくと、近くにいた艦娘たちも同調するように頷いた。
彼女たちは人間を嫌っていた。理由はそれぞれだが、ブラック鎮守府の被害者であるゆえに、その気持ちは当人同士にしかわからないかもしれない。
そんな彼女たちの中には、剣呑な視線を向けている者もいる。
「……隙を見せたら殺してやる」
物騒な言葉を吐いた艦娘に、他の少女たちがギョッとした。
人間は嫌いだし、いなくなってほしいが、殺したいとまでは思っていないようだ。
しかし、言葉を発した艦娘は違うようだ。事実、彼女は昨日着任した提督を殺そうとした。だが、霞がつきっきりのため実行できなかったのだ。
寝込みを襲うとも考えたが、あろうことか提督と霞は同じ部屋で、同じベッドで眠っているのだ。
（――絶対、いやらしいことをさせてるんだ。許さない）
拳を固く握り、提督を抹殺せんとばかりに震える艦娘は――川内型一番艦　川内だっ

た。

「じゃあ、さっそく今日のノルマを片しちゃおうぜ」

「そうね、すべきことはたくさんあるし、ここの艦娘とも早く顔を合わせなければいけないしね」

小林の言葉に頷く霞。

二人がすぐにここの艦娘と顔を合わせないのは、こちら側の艦娘の数が揃っていないからだった。

今までいくつものブラック鎮守府を摘発している小林だからこそ、行動は慎重だ。

彼の同僚や、知り合いなどは、元ブラック鎮守府に単身乗り込んで、襲われたり、怪我したり、死にかけたりしながら艦娘たちの信頼を得ているようだが、そんな面倒なことはごめんだった。

人間を恨みたい気持ちはわかる。だが、それを理由に実際に行動されたら目も当てられない。

というか、艦娘じゃなくても、上官を襲撃すれば大問題だ。それでなくとも、艦娘に対するアンチがそこら中にいることもあり、不要な問題は起こすことは好まない。

ゆえに、小林は、自分の仲間と言える艦娘をある程度揃えてから、ここの艦娘と会うことに決めている。

少なくとも、同じ艦娘同士なら会話はできるだろうし、数人いれば一方的になにかされることはないと考えたのだ。

「さてと、朝潮と明石が部屋に荷物を置いてこっちに戻ってきたら、建造するか」

「やっとね……そういえば、あんたの建造方法ってちょっと違うって聞いたわ。明石があんなにゃーにゃー言ってるのもそのせいなの？」

「あー、説明してなかったね。俺って、普通の建造ってしちゃだめなんだ」

「……どういうことよ？」

「一部の提督にしかできないちょっと特殊な建造方法があるだよ」

「なによ、それ？」

「メンタルキューブって知ってる？」

霞は首を傾げた。

建造されて数年だが、メンタルキューブなど聞いたことはない。知識としてもなかった。

そもそも霞の知る建造に、そんなものは必要ない。

「えっと、賀集大将の師匠にあたる方が、未知なる物質を発見したんだ。それにものすご

いパワーが秘められているとかいないとか、んで、研究した結果、ちょっと違う感じの艦娘が生まれるらしい」
「意味わかんないんだけど」
「俺だってわかんないよ。研究に関わってた夕張が言うには、別世界の艦娘を召喚しているみたい。だけど、それが可能な提督は限られているんだってさ」
「じゃああんたは?」
「メンタルキューブを使った建造との適合性っていうのかな。それがすごいらしい。今回、鎮守府をひとつ任されたのも、メンタルキューブを使った建造の試験的な面もあるんだよ」
「そうなのね」
「あ、ちなみに、これって機密だから他言しないように」
「ちょっ――あんたね!　機密ならたわいない会話するみたいに言わないでよ!」
　実にあっさりと機密を言い放った小林に、霞は頭痛を覚えた。
　すると、
「あの、ごめんなさい。朝潮、聞いてしまいました」
「……明石もだにゃ。ちょっとは知ってたけど、まさか機密だったとは思わなかったにゃ」

執務室にタイミング悪くきてしまった朝潮と明石が、気まずそうな顔をして中に入ってきた。
「ああ、別に気にしなくていいよ。ここの艦娘ならさておき、朝潮と明石のことは信頼してるからさ」
「提督！」
「嬉しいにゃ」
「さてと、じゃあさっそく建造しにいきますか」
「「はい！」」「はいだにゃ！」

⑥建造。そして兄貴姉貴の登場。

ドックの場所は、プールが隣接する場所だった。
外見だけはプールだが、中は相応に改造されており、地下へと広くなっている。
「無駄に金かかってるな。んじゃ、明石、よろしく頼む」
「はいだにゃ。その前に、ちょっとここの妖精さんたちを探してくるにゃ」
「はいよ、よろしくー」
明石がドックの奥へ消えていくと、霞が訪ねてきた。
「ねえ、明石が言ってたけど、あんたにとってあの子が初めての艦娘ってこと？」
「メンタルキューブの建造でって意味なら、うん」
「どうして、今まで一般的な方法で艦娘を建造しなかったんですか？　確か、研修中に一度は建造するはずではなかったでしょうか？」
霞に続き、朝潮も疑問を浮かべてくる。
そう、彼女たちのいう通り、確かに提督候補生たちは、最低でも一度は建造を経験している。もちろんメンタルキューブを使用しない方法で、だ。
提督候補の大半が自分の建造した艦娘とペアを組むことになっている。中には、建造

を失敗する者もいた。
「俺だって建造したよ。でも、失敗ばかりでね、装備は当たりばかりなんだけど」
「セクハラばっかりするから警戒して出てこないじゃないのかしら」
「こらっ、霞っ」
「セクハラって……霞にしかしてないのに！」
「嘘つくな！　朝潮姉さんにもしてるじゃない！　荒潮姉さん……は、うん、置いておくとして」
「ええ、荒潮は置いておくとしましょう。あの子が小林提督の鎮守府に私が配属されると知った時……大変でした」
「でしょうね」
　そんなやりとりをしていると、明石が妖精を肩や頭の上に乗せて、戻ってきた。
「準備できたにゃ。司令官の妖精さんたちがここの妖精さんたちを協力的にしてくれてたからすぐに建造できるにゃ」
「そりゃありがたい。妖精さんたちにはあとで○イズのチョコレートをあげよう」
「ていとくさんすてき！」
「だいて！」
「はらませて！」

「まさかのろ○ず！」
「これだからこばやしていとくはさいこうです！」
「ほかのていとくにはないものをもってます！」
「喜んでくれてなにより。さっそく建造するぞ」
「「「「おー！」」」」

「はじめまして、指揮官！　私はクリーブランド、海上の騎士だ！　時は金なり――さあ、休んでる暇はないぞ！」
「え？　クリーブランドって、アメリカ海軍の軽巡洋艦だよね。クリーブランド級一番艦の」
「そうそう。知っててくれて嬉しいな。よろしくね、指揮官！」
　メンタルキューブを使用した建造で現れたのは、クリーブランドを名乗る少女だった。
　明るい髪を伸ばし、一房だけ結った髪型。赤い瞳と、笑顔が眩しい美少女だ。白いマントを羽織、アメリカを意識しているのか靴下は星柄だ。
　躍動的な声音の中に、落ち着きと頼り甲斐のありそうな強さを感じることができた。

「会えて嬉しいよ。俺は小林環だ。末長くよろしく」
「うん、よろしくね」
「この子たちは君の同僚になる駆逐艦たちだ」
「朝潮型一〇番艦霞よ」
「朝潮型一番艦朝潮です！」
「工作艦の明石だにゃ」
「みんなよろしくね！」
　まさかのアメリカ艦の建造に驚きはしたものの、小林たちは新たな仲間の登場を心から歓迎したのだった。
「じゃあ君の部屋に案内するね。お世辞にも、素敵な鎮守府、とは言えないけど、そのあたりも道中説明するからさ」
　少女たちよりも背丈の高いクリーブランドの姿に、まるでお姉さんみたいだと感想を抱いた小林は、彼女たちを伴い執務室のある校舎へ向かうのだった。

「へえ。司令官にもいろいろいるんだな」
　一通りブラック鎮守府だったことや、ここの艦娘たちに関することの説明を受けた

クーリブランドの感想はこのような感じだった。

言葉こそ素っ気なく聞こえるかもしれないが、少女の瞳の中には怒りが浮かんでいる。

名も顔も知らない提督に怒り、まだ見ぬ艦娘たちのために憤ることができる優しさを持っているのがよくわかった。

小林はクリーブランドの心情を察しながらも、あえてなにも言うことはなかった。言えなかったと言うべきかもしれない。

小林だって前提督には色々と思うことはある。だが、自分の親しい艦娘が被害にあったわけではないので、どこか他人事のように思っている自覚もあった。それがひどく、人として最低な気がして、吐き気がする。

これが霞たちや、目の前にいるクリーブランドのことだったら、腑が煮え繰り返るほど怒りをあらわにしていただろう。それこそ、彼女たちのために手を汚すことだってできる。だというのに、ここ駿河第一鎮守府の面々のためには同じように思えないのだ。

もちろんひどい目にあっていた分、優しくしてあげたい。道具ではなく、人として楽しいことをもっと知って欲しいとも願っている。だが、どうしても霞たちと区別してしまうのだ。

それが提督として正しいかと問われれば、きっと違うのだろう。

「司令官？　どうかした？」
「ううん、なんでもないよ。さてと、そろそろ昼ごはんができるみたいだけど」
「楽しみだな！　この姿になって初めての食事なんだ」
「……申し訳ない」
「え!?　なんで謝るんだ？」
「よくよく考えれば、人の姿になってはじめての食事が……大量にもらったうどんなんて。アメリカらしくステーキとか食べさせてあげればよかったんだけど」
「ううん、そんなこと気にしなくっていいよ！　みんなと一緒にごはんを食べられるってことが嬉しいんだからさ」
「クリーブランド」
　そう言ってくれる彼女はきっと本心で、こちらを気遣ったわけではない。それでも、クリーブランドの言葉が嬉しかった。
　そんな時、
「はいはい、おしゃべりはそこまでにして」
「うどん茹で上がりました！」
「お汁は明石と妖精さんの力作にゃ」
　霞たちと妖精さんが、茹で上がったうどんと汁を持ってやってきた。

みんなで昼食をとるにはあまり物がない執務室がちょうどよかった。食堂もあるのだが、今頃、ここの艦娘たちが使っているはずなので、遠慮していたこともある。

出汁のいい匂いが鼻腔をくすぐり、誰かのお腹がなった。

「もしかしてクリーブランドかな？」

「違うよ！　私じゃないから！」

「じゃあ、霞か」

「違うわよ、このクズ！」

「朝潮でもありませんよ」

「明石でもないにゃ」

「いや、別にお腹がなるくらいいじゃん」

女の子を相手に、お腹を鳴らした子を突き止めようとする、デリカシーのかけらもない小林だが、どうやら本当に四人ではないらしい。

じゃあ誰が、と口を開こうとしたとき、

「あ」

誰かが声をあげた。

同時に、霞たちが、小林の背後にある執務室と廊下を繋ぐ、開けっ放しの扉に視線を向ける。

小林は彼女たちの視線を追うように振り返った。

「うん？」

すると、そこには小柄な少女たちがこちらを伺っているのを見つけたのだった。

⑦暁型とうどん

「み、見つかっちゃった！」
「逃げるのです！」
「う、うらー」
「早く逃げるのよ！」
　こちらをのぞていた少女たちと目が合うと、彼女たちは慌てて逃げようとする。しかし、一人が慌てすぎたせいか、足をもつれさせて転んだ。続いて他の少女たちが、倒れた少女に足を取られ、次々と重なるように転んでいく。
　ぐえっ、という声が聞こえたため、小林たちは慌てて席をたち、少女たちを助けようとした。だが、「大丈夫？」と心配して手を伸ばした小林に、彼女たちは明確な怯えを見せたので、つい手を引っ込めてしまう。
「ほら、立ちなさいよ」
「捕まっていいぞ。うわっ、軽いな。ちゃんとご飯食べてるのか？」
　霞とクリーブランドが少女たちを抱き起こす。

朝潮と明石は転んだ少女たちのために救急箱を用意していた。だが、幸いにも手当てが必要な怪我はないようだ。
「ご、ごめんなさい、ちょっといい匂いがしたから見にきちゃって……叱るなら私だけにしてください」
黒髪の少女が、小林に向かって頭を下げる。
続いて、他の少女たちも、自分達が悪いとばかりに声をあげて続く。
そんな四人の少女に、小林だけではなく、霞も、朝潮も見覚えがあった。
――暁型駆逐艦。
一番艦である暁を始め、響、雷、電の四姉妹だ。
(気のせいかな、俺の知ってる四人に比べて、痩せている気がするんだけど)
「別に叱ったりしないわよ。ね、提督」
「あ、ああ、うん。別に叱るようなことをされたわけじゃないし、怖がらなくてもいいよ」
そこまで言い、小林提督は暁型の少女たちと視線を合わせるため、膝をつく。
「俺は新しくここ駿河第一鎮守府の提督になることになった、小林環だ。よろしく。前の提督とはいろいろあったと思うけど、一緒に新しく頑張っていけたらいいと思ってる」
握手しようと手を差し出すと、黒髪の少女がおずおずと握ってくれた。

「あ、暁よ！　一人前のレーディーとして扱ってよね！」
「響だよ。その活躍ぶりから不死鳥の通り名もあるよ」
「雷よ！かみなりじゃないわ！そこのとこもよろしく頼むわねっ！」
「電です。どうか、よろしくお願いいたします」
長女に続き、それぞれ自己紹介をしてくれた。すると、ぐうぅうう、と誰かのお腹がなった。暁が顔を真っ赤にして俯いたので、おそらく音の主は彼女なのだろう。
小林は苦笑すると、
「きっとこうしてであったのも何かの縁だから、お近づきの印にうどんでよかったらい一緒に食べないか？」
食事のお誘いをした。
少女たちはお互いに顔を見合わせた後、少しだけためらいを見せたものの、頷いたのだった。

小林提督と艦娘たちが見守る中で、暁型の四人は一心不乱にうどんをすすっていた。
鰹出汁の温かい汁と、半熟の卵と油揚げをトッピングしたシンプルなうどんだが、少女たちはまるで何日も食事をとっていなかったのではないかと疑いたくなるほど、息を

する間も惜しいとばかりに食べ続ける。
はじめは驚いた顔をして見守っていた小林たちだが、うどんを食べながら涙を流し始めた暁たちに、さらに驚くことになる。
うどんをたべるだけで、泣くような理由がどこにあるのだろうか、と首を傾げてしまう。
「えっと、そんな泣いて食べなくても……もしかして嫌だった？」
「違うのです。ごはんなんて、ずっと食べてなかったので、嬉しかったのです」
「は？」
代表して電が返事をしたが、その回答は予想外のものだった。
小林だけじゃない。霞も、クリーブランドも、朝潮も、明石も、驚きに目を見開いている。
「待って、ちょっと待って、ご飯食べてなかったてどういうこと？」
「ちょっとこのクズ提督！　ここの鎮守府のケアはちゃんとされてるんじゃなかったの!?」
「してあるはずだよ！　業者が二週間に一度は食料を、足りなくなった場合を考えてお金だって！　ええっ、うっそぉ」
電の言葉を疑うわけではないが、業者に関する書類だって昨日見ている。艦娘関連で

犯罪をすれば、必要以上に厳しく裁かれるため、業者だって馬鹿なことはしないはずだ。

仮に食料が届けられていなかったとしても、金は間違いなく、この鎮守府に届いている。それは確認してあるし、使われた形跡もあった。なのに、暁型は食事をとっていないという。

――そういえば、昨日、鳳翔が食事をさせてくれって意味わかんないこと言ってきたけど、あれは食事がとれてなかったってことなのか？　いや、なら、なんでそう言わない？

小林は食事など当たり前なものに困っているとは思っていなかった。そもそも、前提督だって食事は質素ながら三食しっかり与えていた。夜間出撃の艦娘は、夜食も配給されていた。

ブラック時代で食事していたのに、なぜ、解放されて食事ができていないのか理解ができない。

「ごちそうさま。三ケ月ぶりに、ちゃんと食事ができて嬉しかった。ありがとう」

響が箸を置き、そう言った瞬間、小林の中でなにかが切れた。

彼はそのまま執務室の窓を開けると、

「鳳翔ぉおおおおおっ、間宮ぁあああああああっ、今から執務室にきやがれぇえええええ！」

食事を担当していた艦娘から事情を聴くべく大声をあげたのだった。

⑧自分だけが良ければいいって奴ってどこにでもいるよね

血相を変えた鳳翔と間宮が執務室に飛び込んできたのは、小林が怒鳴ってから一分も立たなかった。

突然大声をあげた提督に、暁型の四人は怯えてしまったが、面倒見のいい姉御肌のクリーブランドが落ち着かせてくれた。彼女に感謝しながら、深呼吸を繰り返して冷静に努めようとする。

「さて、俺がまだ笑っているうちに、全部話してもらおうか」

「あんた、笑ってないじゃない。二人、いいえ、みんなが怯えてるから威圧するのやめなさいよ。このクズ！」

パンっ、と背中を叩かれて、冷静さを欠いていたことを自覚した小林は、努めて声から怒りを排除する。

「鳳翔、間宮、君たちは食堂を、ここの艦娘たちの食事を預かっている。まちがいないか

？」
「はい」
　二人は言葉短く肯定した。
「だけど、だ。前提督が捕まってから、俺が着任するまでの三ヶ月、まともに食事をしたことがない艦娘がいるっていうのはどういうことだ？」
「それは」
「二週間に一度、食料は届いている。万が一のために金も振り込まれていた。なのにどうしてだ？」
「……」
　此の期に及んで、黙り込む二人に、苛立ちが湧く。
「鳳翔、君は昨日俺に食事をさせてくれって言ったな。どうしてあのとき、ちゃんと言わなかった。なにか理由があるのだろう？」
「鳳翔さんは悪くないわ！」
「そうだよ。鳳翔さんと間宮さんだって、なにも……いいや、二人は誰よりも食べてないんだ」
「どういうことだ？」
　暁と響がかばうように声をあげた。

続いて、雷と電も。
「みんなごはんをちゃんと食べてないのは一緒なの」
「……ごめんなさい、電たちだけごはんたべてしまったのです」
ますます意味がわからない。じゃあ、食料と金はどこに消えたというのだろうか。
横領はまずあり得ない。軍関係者が全員善人とは言わないが、元ブラック鎮守府は注目が良くも悪くも集まる。そんなところから横領するのはリスクが大きい。もっと言うと、立て直そうとしている鎮守府から横領などすれば、一生刑務所だ。
そのくらい艦娘に関する犯罪は厳しく罰せられる。
「あのさ、別に司令官だってみんなを責めているわけじゃないよ。でもさ、事情を言ってくれなきゃ、なにもしてあげられない。それは私たちだって同じだよ」
「……あなたは？」
「私はクリーブランド級の長女、クリーブランド。えっと、聞けば初めて建造されたらしいからはじめましてだね」
見慣れない艦娘に驚く鳳翔と間宮。まさか、新しい提督が建造で今までにない艦を喚んだとは思いもしなかっただろう。
同時に、クリーブランドの優しくも、力強い瞳に、安心感を覚えたのかもしれない。鳳翔は、なにかを諦めたように、口をゆっくりと開く。

「食料は確かに届きました。お金も、必要以上にもらっています。ですが、その……」
「一部の艦娘たちによって独占されているんです」
最後の最後まで言いづらそうにしていた鳳翔の言葉を引きついだ間宮によって、ようやく合点がいった。
「俺に事情を話せなかったのは、その艦娘を守ろうとしてたのか？」
「……はい。確かに、あの方たちの行いは許せません。ですが、それを提督にお伝えしたら……」
「まあ、迷わず解体だな」
「――っ、ですから！」
「だけど、まあ、事情を何も知らずに、いきなりやらないと約束してやる。だから、全部話すんだ。今度は隠し事なしだ」
もう隠し通せないと判断したのか、鳳翔と間宮は小林たちが見守る中、この三ヶ月間のことを話しだしたのだった。

「はぁ！　なんなのよ、それ！　ばっかじゃないの！」
すべての話を聞き終えて、怒りをあらわにしたのは霞だ。

「信じられません。自分たちが良ければそれでいいなんて、よくもそんなこと」
「愚か者にゃ。そんな奴らなんて、仲間じゃないにゃ」
霞だけじゃない。朝潮も、明石も、鳳翔が語った内容に間違いなく憤っていた。
「司令官。私もかなり怒ってるんだけど、どうするんだ？」
クリーブランドの問いかけに、小林は考える。
すべての元凶は、前提督のもう一代前の提督時代に建造された艦娘たちによるものだった。
長門、陸奥、伊勢、日向、加賀、赤城の六人。
彼女たちが、食事を独占し、金も勝手に使っていたという。それだけじゃなく、三ヶ月の間、好き勝手に出撃を繰り返し、ときには駆逐艦を無理やり同伴させるなどやりたい放題だったという。
駆逐艦が傷ついても入渠は自分たちが優先。酷い場合は、入渠さえさせないなど、ブラック鎮守府さながらの行為。
鳳翔や金剛型が抗議を重ねたことで、無理やり出撃に付き合わされることはなくなったが、その代わりとばかりに食事が奪われた。
曰く、「出撃しないなら食事もいるまい」らしい。
「あの長門が信じられない」

そんな言葉がつい出てきてしまうほど、小林は動揺していた。

彼には横須賀の長門という友人がいる。向こうからは同士と呼ばれるような仲だ。

小林が友と呼ぶ長門は、駆逐艦が大好きで、正直引くレベル。霞をはじめ、朝潮、荒潮、曙などを可愛がっている小林を盟友として認識しているようで、二人で阿呆なことを何度もやってはは、横須賀の陸奥に怒られたことは数え切れない。

確かに、艦娘ひとりひとりに違いがあるとはいえ、こうも同じ長門でも違うのかと思わずにはいられなかった。

「普通に考えて、解体だろ」

「そんな！」

「俺には鳳翔が庇おうとする理由がわからない」

二代前の提督は、戦艦と空母に重きを置き、駆逐艦と巡洋艦を軽視していたという。その扱いはあからさまであり、優遇され続けてきた長門たちは自然と「そういうもの」として当たり前に自分たちの境遇を受け入れてしまった。

駆逐艦を盾にし、巡洋艦を軽視し、自分たちがいるから鎮守府は回っていると勘違いしてしまったらしい。

ある意味、馬鹿な提督の被害者なのかもしれないが、優遇された自分と差別された仲間を見てそのまま受け入れたのならば、その提督と同類だったのかもしれない。

「た、確かに、長門さんたちには酷いことされたし、怖いけど、解体なんて」
暁が鳳翔に続き、庇おうとする。
これはきっと長門がどうこうではなく、同じ鎮守府の艦娘だからという考えからきていると思われる。
心優しいのは結構だが、時と場合による。
少なくとも、今話に聞いたような艦娘は、小林環の鎮守府には不必要だ。
「とりあえず、やることができたな」
「なにするつもり？」
「まず、食べさせなきゃな。幸い、無理やり持たされたうどんが山のようにある。馬鹿たちを抜けば、十五人くらいだろ、問題ない」
うどんならさっと茹でられるし、久しくまともに食事をしていない艦娘にも食べやすいだろう。
「霞、朝潮、明石、クリーブランド。そして鳳翔、間宮、暁、響、雷、電」
名前を呼ばれて、それぞれが背筋を正す。
「食堂に長門たちを除く艦娘を集めろ。そして、ご飯だ！」
「「「はい！」」」

⑨素麺とかうどんて消化にいいよね

「ねえ、夕立たち食堂に集められてどうなるっぽい？」
「僕にだってわからないよ。金剛さんや川内さんたちが言うには新しい提督がきたらしいよ」
「……新しい提督って、前みたいな人っぽい？」
「どうだろうね。会ってみなきゃわからないけど……できれば違う人であることを願うよ」
不安そうに会話しているのは、白露型駆逐艦の夕立と時雨だ。
色素の薄い髪とリボン、そして赤い瞳の夕立。黒髪のおさげの時雨。どちらも改造されている。かつてブラック鎮守府だったここで一年ほど前に建造され、戦闘を続けてきた艦娘だ。
揃って表情は暗い。無理もない。二人にとって提督は、自分たちを道具としてしか見ない冷たい瞳を持つ、機械的な人間なのだから。

特別ひどいことをされたことはないが、戦闘力、労働力として淡々と扱われるのはなかなか苦しいものがあった。まるで個性を殺されてしまったような感覚さえ覚え、戦う為だけの機械になっていくような錯覚に陥ったことは一度や二度ではない。そんな二人が、自分を見失わなかったのは、姉妹艦であるお互いの存在と、家族同然に支えあってきた仲間たちのおかげだ。

「心配すんなって、いざとなりゃこの天龍様が守ってやるからよ！」

「うふふ。私もいるから心配しなくていいわぁ」

「天龍さん、龍田さん」

「おう。あの冷酷提督がいなくなっても、扱いがよくなる保証なんてねえからな。最悪の場合は、思い知らせてやるぜ」

ぎりっ、と奥歯を噛みしめる天龍と、笑みを浮かべているが、同じようにみんなを守ろうと決意している龍田。

二人は姉妹艦であり、やはり改造されている。女子高生的な制服と外見年齢と紫がかった髪をショートにした美少女である。天龍は角のような艤装と刀を持ち、眼帯が特徴的だ。龍田は長槍と天使の輪のような艤装が特徴な艦娘だ。

駆逐艦からの信頼の厚い天龍と龍田の声に、一応だが不安が薄れる夕立と時雨。二人は、遠征や海域で何度も守ってくれた姉貴分とも言える艦娘なのだ。

「そういや、暁たちがいねえな」
「あと叢雲ちゃんもいないわねぇ」
暁型四姉妹は新提督と一緒にいるのだが、そんなこと知る由もない二人は心配になる。集まりが悪く、新しい提督が怒ったりしたら目も当てられない。その矛先が駆逐艦に向くのも望まない。
「叢雲は金剛さんたちを呼びにいったっぽいけど……」
「きっとこないと思うよ」
「そうよねぇ」
長門たちを除いた艦娘が集められたということは、現在の鎮守府の事情は提督に伝わっているはずだと四人は考える。
夕立たちの記憶にある長門たちは、一年前すでに暴君のような振る舞いをしていた。龍田と天龍も、二つ前の提督の時代からいる古株だが、やはり彼女たちの記憶にも決していい記憶はない。
現在、気にしないようにしているが、四人は揃って空腹だ。
絶食とは言わないが、ほとんど食べていないに近い状態はいくら艦娘と言えど辛い。水道水で腹を満たすことは毎日だし、少ない非常食を分け合ってもいざというときのために普段は極力口にしないようにしているのが現状だった。

いいダイエットになっていると、ここにいない鈴谷などは言っているが、いつ彼女の怒りが爆発して寮の一角を占拠して好き勝手やっている長門たちに突貫するか気が気ではない。

「ま、同じ理由で鈴谷と熊野もこねえだろうな」

この場にいないのは、みんなを一応呼びにいっている叢雲、戦艦の金剛、比叡、榛名。巡洋艦の川内。鈴谷、熊野。そして、鳳翔、間宮、暁、響、雷、電だ。

金剛型の三人と、最上型の二人がこの場にいないことに不満はない。むしろ、どのような提督かわかるまでこないでほしいというのが天龍たちの本音だった。

とある事情から、極力部屋から動けない艦娘がいて、少ない食料も優先的に回している。だからこそ、空腹でも口にしたりしない。そんなことをすれば、遠慮して食べてくれなくなる恐れすらがあるからだ。

助け合っている艦娘たちがいるからこそ、好き勝手やっている艦娘を許せないを通り越し、憎んでいる。

今の天龍たちは自分だけが良ければそれでいい長門たちと、その蛮行を許してきた今までの提督と人間たちを心から恨んでいるのだった。

「……どうやら私が最後みたいね」

「結局誰もこないんだな。川内は？」

「見つからなかったわ」
「ったく、なにしてんだよ、あいつは」
　事情がある五人とは別に、単独行動が多い川内に天龍は舌打ちする。
　姉妹艦神通を失って以降、ひとりでフラフラしていることが多いのだ。心配しているが、本人は平気だというし、姿を消すので構うことができない。ただ、食事に関しては同じく空腹なためか、寝ていることが多いと聞いたことがある。
「おい、叢雲。お前さ、新しい提督とあったんだろ。どんな奴だった？」
「さあ？」
「さあって、お前な！」
「ちょっとあっただけじゃわからないわよ。前の提督だって、最初はすごくいい人だったじゃない」
「え？　どういうこと？」
　叢雲の発言に驚いた声をあげた時雨が、さらに質問をしようと口を開こうとした時だった。

「みんな！　ごはんを持ってきたわよ！」

大きなお皿を持った雷が元気よく、食堂に現れた。
空腹に苦しいでいるとは思えない、覇気のある声を聞いたのはいつぶりか。いや、初めてかもしれない。前提督時代も、食事はあったが質素だったので、物足りなさはあったのだ。
「お待たせ！　そーめんとうどんよ！」
「おつゆもあるのです！」
「薬味もあるよ」
続けて、暁が、電が、響が入ってくる。
彼女たちの手の上にあるお皿には、大盛りの素麺とうどんが積まれていた。
そして、鰹だしの香りがするおつゆと、ネギや生姜などの薬味から、ハムや薄焼き卵を刻んだトッピングもある。
五人の思考から、新しい提督がどうこうというものが消え、「食べたい」という感情が大半を占めていく。
さらに、続けて鳳翔と間宮が同じように素麺を持って笑顔で現れれば、食事ができると期待してしまうのも無理はない。

「ちょっと、慌ててひっくり返さないでよ」
「ふふっ、素直に気をつけてって言えばいいのに、霞は素直じゃないな」
「ちょ――クリーブランド！　余計なこといわないでくれる!?」
「相変わらず霞は素直じゃありませんね」
「ツンデレにゃ」
「朝潮姉さんと明石まで！」
この鎮守府では見覚えがない霞、朝潮という艦娘に続き、初めて聞く名前のクリーブランドという艦娘、明石と呼ばれながら全然見覚えのない明石も、食器やお箸を持って現れた。
間違いなく、新しい提督の艦娘だ。
五人は静かに提督の登場を待つ。が、なかなかこない。
そうこうしているうちにテキパキと机に素麺たちが並べられていく。
「私は朝潮型駆逐艦の霞よ。新しい提督の艦娘になるわ。でも、今はまず、提督からの命令を伝えるわね」
ごくり。誰かが息を飲んだ。

「お腹壊さないようによく噛んで食べなさい！」